

ヒバクシャ医療国際協力通信

CONTENTS

- 第2回韓国医師等受入研修を実施
- ソウル・大邱再訪～韓国の被爆者医療の現状～
- ベラルーシ共和国から医師を招聘
- お知らせ

第8回永井隆平和記念・長崎賞候補者を募集
小中学校で出前講座を開催します
セミパラチンスク核実験場の秘話「人間とアトム」を翻訳



▲ 韓国の医師らに向けた被爆者医療セミナーの様子(ソウル赤十字病院)

第2回 韓国医師等受入研修を実施

今年度2回目となる韓国医師等の受入研修を1月に実施しました。

今回の研修には、韓国に居住している被爆者の医療充実のため、被爆者の医療や援護に携わる7名の関係者が参加しました。

研修者は1月18日に来崎し、事務職3名が1月22日まで、医療職4名が1月24日まで長崎に滞在して、日本赤十字社長崎原爆病院をはじめとする医療機関や、長崎大学、放射線影響研究所などの研究機関等で被爆者医療に関する知識の習得や情報交換を行うとともに、原爆資料館などを訪れ、被爆の実相についても学びました。



長崎原爆病院で研修を受ける研修者ら

陝川郡保健所(産婦人科) チョン ソン ユク 鄭 善旭 医師

今回の研修により、原爆投下後の悲惨な状況について実感するとともに、現在もその影響が続いていることを学び、このようなことは二度とあってはならないと思いました。今後は、学んだことを忘れず、被爆者の方の気持ちを考えながら診察を行いたいと思います。

嶺南大学校医療院(放射線腫瘍学科) キム ミョンセ 金 名世 教授

研修機関の方の熱意を感じ、また、なぜ平和を求めべきかを考えるためにもとても有意義な時間を過ごすことができました。今後ともナシムの研修を継続していただき、研修だけではなく交流を深める場があればと思います。

慶熙大学病院(家庭医学科) キム ジェンス 金 重洙 医師

被爆者の現況と医療支援の実情について理解することができました。これからは、韓国の被爆者の方のために何かできることがあればと思います。また、この交流がこれからも続くことを願っています。

ソウル赤十字病院(外科) ^イ李 ^{ミギヨン}美景 医師

今回の研修で被爆者に多く見られる疾患について知ることができ、また、診療する際に患者の精神的な面も理解することの大切さを改めて学ぶことができました。今後は、学んだことを生かして一つ一つ手順を踏んで診療したいと思います。

ソウル赤十字病院(総務課) ^{カン}姜 ^{ジエウォン}在遠 課長

原爆に対して漠然としたイメージしか持っていませんでしたが、今回の研修で被害の程度や威力についてより深く知ることができ、被爆者への医療及び支援の必要性を感じ、理解することが大事だと思いました。

保健福祉家族部 ^{チェ}崔 ^{ジョンチョン}鍾千 主務官

被爆建造物の見学を通じて、原爆投下による悲惨な状況をより現実的に実感することができました。被爆者のために努力されている日本政府の姿に感動するとともに、これからも韓国人被爆者のための支援事業に全力を尽くしたいと思います。

陝川原爆被害者福祉会館 ^{チェガル}諸葛 ^{ロクリム}録琳 指導員

研修の際訪れた様々な施設において原爆投下により悲惨な体験をされた被爆者のため、献身的に仕事をされている姿をみて、福祉会館の被爆者にもっと誠意をもって接したいと思いました。



長崎原爆病院の進藤院長と記念撮影する金名世医師

今回は長崎県の招聘により来崎していたブラジルのサンタクルス病院と日伯友好病院の医師2名(手前の女性2名)も一緒に研修を受けました。



専門家派遣事業 (1月)

今年度2度目となる韓国への派遣事業として、長崎大学原爆後障害医療研究施設の朝長万左男教授と精神・神経科木下裕久講師を派遣し、被爆者医療セミナーを開催しました。

今回は韓国の被爆者医療にも長年携わって来られ、ご退官を間近に控えた朝長教授に派遣の報告及び現地の被爆者医療の現状をまとめていただきました。



大韓赤十字社を訪問した派遣団

ソウル・大邱訪問 ～韓国被爆者医療の現状～

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
原爆後障害医療研究施設分子治療学分野
(原研内科) 教授 朝長 万左男

年明けの1月18日～21日、2泊3日で韓国を再訪した。ソウル赤十字病院および大邱市の南嶺医科大学附属病院を訪問し、韓国内の被爆者医療にたずさわっている韓国医師に対して、長崎における原爆被爆者医療の現状、とくに現在もなお持続する癌リスクについての講義を行うためである。折からの寒波でソウルの夜の気温が零下2℃くらいまで下がり、20日の朝、ソウルから大邱へ新幹線で移動中の河川も氷結しており、冬の韓国を久しぶりに体感した。

NASHIMの韓国派遣事業が始まってすでに10年たったが、開始当時とは比較できないくらい、原爆医療の理解が進んだ。まず、韓国政府が被爆者医療に直接予算を認めるようになったことが大きい。被爆者医療を担当する大韓赤十字社においても、長崎県・市の被爆者医療行政担当の部署とその担当者との交流の蓄積の結果、諸々のノウハウ蓄積も進み、自信にあふれる対応となっており、目を見張るレベルに達した。健康相談事業も3年で希望者をほぼ一巡して、2巡目が開始されることになったが、事前の韓国側による健康チェックもスムーズに行われており、相談の現場で通訳付きで行われるインタビューも効率が高まり、被爆者の方々の満足度も高いものとなっている。

被爆者の医療における最大の課題は、近距離被爆者における癌の頻度が高いことと、距離(被ばく線量)とは関係なく原爆体験者(韓国では被害者と呼ばれている)にひろくみられる精神的影響が持続していることである。この相談事業をきっかけに、少ないものの癌が発見されており、効果があがっていると言える。木下先生らによる精神的影響調査からも、今なお続く不安や悩みが明らかにされており、カウンセリングの重要性が指摘されている。精神医学的あるいは心理学的カウンセリングは地元長崎でも未だ十分には取り組まれていない分野であり、今後どのような方策をとって進めるのか、韓



在韓被爆者のこころのケアの必要性
について講議する木下講師

国内被爆者も含めた総合的な対策が必要と強く感じられた。

ソウル赤十字病院の講演会では、^{キム ハン スン}金漢善院長の計らいで院内の研修プログラムに組み込んでいただき、若いレジデントの先生を含め40名ほど集まっていた。生涯持続性の造血器腫瘍（骨髄異形成症候群および白血病）と癌のリスク（多重癌の問題を含め）に先生方の興味が集中し、多くの質問を受けた。なぜ生涯持続性になっているのか、未だ全貌は明らかではないが、これまでの研究では各臓器の幹細胞が1945年の8月9日（長崎の場合）に放射線でDNA損傷（二重鎖切断）を受け、その後60年以上にわたって被爆者の体内で生き残り、二重鎖切断で生じたゲノム不安定性によって遺伝子変異を蓄積する結果、癌の発

生に結びつく確率が高まるものと推定されると説明したが、納得していただいたように思われた。フローサイトメーターによる幹細胞を単離する方法で、遺伝子不安定性を測定する研究を紹介したところ大変興味を持っていただいた。

夜はしんと冷えるソウルの町に出て、家庭料理の有名な韓式レストランで懇親会をもっていた。院長をはじめ多数の内科の先生方と被爆者医療のあり方をめぐって意見交換が活発に行われた。ホテルに帰る途中、南山公園まで案内していただき、ソウルのみごとな夜景を360度楽しませていただいたが、零下に下がった気温で足がじんじんと冷えてきて、早々に下山した。講演会から懇親会を通じて、親しくなった赤十字病院の先生方と今後の被爆者医療のいっそうの推進と相互訪問・交流を深めるお約束をして、お別れした。





南嶺大学附属病院内を視察する朝長教授

新幹線による大邱への移動はわずか1時間半ときわめて快適で、もう以前のように金浦空港から国内線で移動する不便さは解消されていた。

訪問した南嶺大学附属病院は大邱地域で最も被爆者医療に力を入れていただいているところである。放射線治療科の^{キム ミョンセ}金名世教授は我々と入れ違いで長崎に研修に来ていただいております、韓国から帰着後に長崎大学病院でお会いするという、まさに国際交流を地でいく形となった。南嶺大学病院は巨大な私立医科大学

の附属病院であるが、放射線治療科が独立しており、照射装置などの先端設備も整い、ファントムやコンピューターを駆使した治療技術も高度で、10年前の韓国の医療から飛躍的な進歩が遂げられたことが実感できた。むしろ日本の方が後れをとっている。乳ガンの患者さんの放射線治療の実際を見学させていただいた。韓国内の被爆者の方々も癌の早期発見で、治癒の機会が増えていくことだろう。

昼食時を利用して、大学院講義室でソウル赤十字病院と同じ内容の講演をさせていただいた。ここでも、生涯持続性について質問があり、幹細胞仮説を説明した。10年前に比べ、韓国の先生方が原爆についての知識が増え、また関心も高まってきているように感じられた。以前より切実な問題と韓国の先生方が認識し始めているのは、やはり北朝鮮が核兵器を保有(原爆数個と推定されている)するに至った現実が背景にあるように感じられた。

日本の植民地政策によって日本に居住し、労働していた韓国の人々が被爆し、帰国後半世紀を経てやっと日本からの医療支援を受けることができる時代になったこと、また韓国政府自身も、ハプチョンの原爆被害者福祉会館の増築予算を韓赤に対して付けるなど、理解とともに政策も急速に具体化してきたこと、韓国内の被爆者医療についても韓国の医師たち、赤十字職員たちの理解が高まったことなど、この十年間に確かに大きな進歩がもたらされたといえる。日本政府の外務省、厚労省、長崎県、長崎市、NASHIM、長崎大学、市内の総合病院(原爆病院、市民病院、放影研)、被爆者医療にかかわるすべての関係者の努力が実りつつあることを実感した意義ある韓国再訪であった。訪問の企画と実施に当たっていただいた、長崎県庁の福田恵子氏、韓赤の^{オ サンウン}呉尚恩氏に心から感謝の意を表したいと思います。カムサムニダ。

私は今年度で定年により大学を去りますが、相談事業の2巡目でのさらなる発展を期待し、またNASHIMの派遣事業が今後も日韓両国の自治体・赤十字社・民間交流のユニークな成功例としてますます成果を上げていくものと信じて、報告を終わりたいと思います。

受入研修事業(3月) ベラルーシ共和国から医師を招聘

3月3日からベラルーシ共和国より^{ルスチュク} ^{マクシム} Lushchyk Maxim 医師を招聘し、ヒバクシャ医療研修を実施しています。

Maxim先生はベラルーシ卒業後医学教育アカデミーで上級研究員としてお勤めですが、年齢は30歳とお若く、英語が堪能で礼儀正しい、とても気さくな先生です。2006年にも3ヶ月ほど長崎に滞在し、長崎大学原爆後障害医療研究施設で研究を行ったご経験があるとのことで、日本語の挨拶や食事の箸の使い方は日本人と変わらないほどお上手です。



蔭本会長を表敬訪問したMaxim医師

今回の研修では特に甲状腺疾患の専門家研修を実施するほか、長崎大学において共同研究の打ち合わせを行います。

3月10日には受入研修担当の長崎大学の山下教授とともに蔭本NASHIM会長を表敬訪問し、「ベラルーシには無い最新の医療技術を習得したい。」と研修への意気込みを語りました。

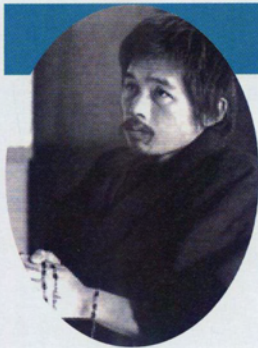
Maxim先生の招聘研修を含めると平成20年度までの受入研修者数は、独自事業で206人、共同事業や調整事業を含めると421人に上りました。今後もチェルノブイリ関係国をはじめ、カザフスタン共和国、韓国等の医師等へ研修を継続するとともに、研修を受けて帰国された方々とのネットワーク構築や共同研究をすすめ、世界のヒバクシャ救済に貢献したいと思えます。

区分 / 年度		4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	計
チェルノブイリ関連	ロシア連邦		1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	2	2	1	1	1	19
	ベラルーシ共和国		2	2	2	2	1	1	1	2	2	2	2	3	2	6	2	6	38
	ウクライナ		2	2	2	2	1	1		1	1	1	1	2	1	1	1	1	20
小計		0	5	5	5	5	3	3	3	4	4	4	4	7	5	8	4	8	77
カザフスタン共和国						1	1	1	1	1	1	3	2	2	1	2	1	2	19
アメリカ合衆国									1										1
韓国					1	1	1	2	2	4	4	12	18	15	12	12	12	13	109
独自事業計		0	5	5	6	7	5	6	7	9	9	19	24	24	18	22	17	23	206
放射線影響研究所					1														1
ベラルーシ友好協会						1	3	2	3	3	3	1							16
長崎大学													2			1			3
エストニア・チェルノブイリ・ヒバクシャ基金																1			1
共同事業計		0	0	0	1	1	3	2	3	3	3	1	2	0	0	1	1	0	21
笹川財団			11	9			11	3	3	1									41
外務省			21	17	17		1				2								58
日本赤十字社		15	3	3	8	3	3	3											38
WHO共同研究			1	6															7
HICARE・広島大		1		3		2	2		1				1	1	1				12
放射線影響研究所									1				1	2	2	1			7
JICA等(セミハラ)										3	1	1	4	5					14
文部省											1								1
ティッシュバンク											2								2
学術振興財団											2								2
その他NGO		4					1									1			6
調整事業計		20	36	38	25	16	9	6	5	5	8	1	6	8	3	2	0	0	188
うち、ウクライナ		0	3	9	8	3	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26
支援委員会補助事業計							1	1	1	1	2								6
合計		20	41	43	32	24	18	15	16	18	22	21	32	32	21	25	18	23	421

H.21.3.3現在

医師等受入研修

第8回永井隆平和記念・長崎候補者を募集



NASHIMでは、長崎原子爆弾被爆50周年にあたる平成7年に、原子爆弾により重傷を負いながら被爆者の救護に挺身した永井隆博士の功績を称え、「永井隆平和記念・長崎賞」を創設しています。

この賞は永井博士の崇高な平和希求の精神を引き継ぐ国際社会におけるヒバクシャ医療への貢献者を顕彰するものですが、平成21年度は第8回目を実施予定です。

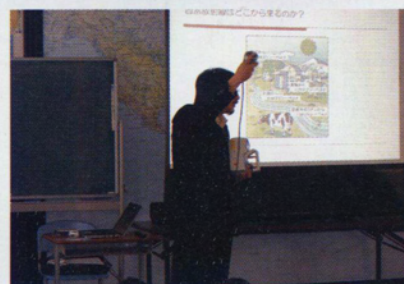
4月から候補者の募集を開始する予定ですので、本賞の候補者としてふさわしい方をぜひご推薦ください。詳細については随時ホームページでお知らせします。

小中学校で出前出張講座を開催します

ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及するため、長崎大学の先生方に小中学校へ出向いていただいて講義を行う出前出張講座を実施しています。平和と科学・医療に関する国際協力への興味・関心を促すことのできる楽しい講座です。

下記の幅広いメニューを小中学生の皆さんにわかりやすく説明しますので、興味をお持ちでしたらぜひ事務局までご連絡ください。

講座メニュー	
身近な放射線の話（自然放射線、放射線発見の歴史と応用）	
チェルノブイリにおける国際被ばく者医療協力	世界最大の原子力発電所事故被災者への医療協力 ベラルーシ人から見たチェルノブイリと長崎 テレメディスンによる遠隔医療協力
カザフスタンにおける国際被ばく者医療協力	世界最大の核実験場セミパラチンスク（カザフスタン）と長崎 カザフスタン人から見たセミパラチンスクと長崎
世界の被ばく事故と国際被ばく者医療協力	世界の被ばく事故について もし、被ばく事故が起こったら 放射線障害を治療する最新医療（再生・移植医療について）
長崎原爆の話	原爆直後の救護活動と調査 長崎原爆被爆者のこころの調査
在南米・在韓国被爆者	海を渡った被爆者
世界保健機関 WHO からみた長崎の国際被ばく者医療協力	
放射線・紫外線とわたしたちの健康	



セミパラチンスク核実験場の秘話「人間とアトム」を翻訳

今年はカザフスタン共和国のセミパラチンスク核実験場で初めての核実験が行われてから60年目になります。NASHIMではこの節目に合わせて、ロシア語で書かれた故ボスタエフ・ケシリム氏の著書「人間とアトム」の翻訳を行いました。これは、セミパラチンスク核実験場の閉鎖を求める戦いについて語られたドキュメンタリー中編小説で、著者であるボスタエフ氏の「人々が類似の過ちを繰り返さないよう予防するための記念として多くの人に読んでいただきたい」との思いがこもっています。今後は日本語訳したこの著書を広く皆様に読んでいただくため、出版に向けた作業を行っていく予定です。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第25号

発行/平成21年3月25日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)
〒850-8570 長崎市江戸町2-13(長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内)
TEL 095(895)2475 FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/ E-mail n_admin@nashim.org